森林犯罪告発人制度管見（一） ■ 領邦国家と農村共同体

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>若曽根 健治</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>熊本法学</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>□</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| その他の言語のタイトル | 略

URL
http://hdl.handle.net/2298/2600
[Chinese text]
森林犯罪告発人制度管見（一）

論説

一 本稿は、先の「ティロール森林令雑考」（首邦立法史研究発表）の経緯をなすものである。すなわち、筆者の考えて、十五世紀・十六世紀の交わりに至るティロール領邦における森林管の正規化を採用し、中央組織に組み込む契機となった一つとして、ラント裁判権所有者（領主貴族）たる在地（土着）権利者に対する統制の作用に言及した。他の地方組織である農民団体の自由（土着）権力の力にかんじては、森林官の活動が「森林犯罪告発人設置を通じて「遊察の警察」を生じ」み。これが「農民団体の「村の警察」に対立してゆく」と概括するに止め、その展開を別稿に残した。今やこれを本稿で果たしたい。

若曾根 健治
[Image 0x0 to 419x584]
本稿は、一五〇三年森林令第一条の解顕を通じ『森林犯罪告発人』設置の持つ歴史的意義を究明するものである。すなわち『森林犯罪告発人』設置は、ティヨーレ農村共同体史上の一画期をなした事件である。インスブルック中央政府（Staatsrat und regenfund zu Yinspruge）は、『森林犯罪告発人』制度を設けることにより、農村共同体の一部に一・明瞭な制を刻み込んだ。この制度が『官憲思想』である。確にそれは、よし『官憲思想』がティヨーレ農村共同体に浸透した最初の出来事ではないが、それが明確であったからこそ、これまでにしてきた歴史的意義を解明して行くことができる。この『官憲思想』の『領邦警察』の一部を形成するに止め、告発人設置によって直ちに、農村共同体にたいし『官憲思想』が全般的な浸透したわけではない。しかもそれは、『森林犯罪告発人』制度は、『官憲思想』の浸透を目標にして『領邦警察』の設置方法の点で前段・後段に分け得る（すなわち、前段＝村民自身が告発人を選挙する。『領邦警察』の一発現）の次に、これに即し後段＝森林令第一条が前述の如く、『森林犯罪告発人』設置方法の点で前段・後段に分け得る（すなわち、前段＝村民自身が告発人を選挙する。『領邦警察』の一発現）の次に、これに即し後段＝森林令第一条が前述の如く、『森林犯罪告発人』設置方法の点で前段・後段に分け得る（すなわち、前段＝村民自身が告発人を選挙する。『領邦警察』の一発現）の次に、これに即し後段＝森林令第一条が前述の如く、『森林犯罪告発人』設置方法の点で前段・後段に分け得る（すなわち、前段＝村民自身が告発人を選挙する。『領邦警察』の一発現）の次に、これに即し後段＝森林令第一条が前述の如く、『森林犯罪告発人』設置方法の点で前段・後段に分け得る（すなわち、前段＝村民自身が告発人を選挙する。『領邦警察』の一発現）の次に、これに即し後段＝森林令第一条が前述の如く。
森林犯罪告発人制度管見（著：若曾規）

森にふれたい。伊藤教授は、（A）ゲノセンシフト（村落共同体）における共同地（特に「共同森林」）利用の「変質過程」を論及する。すなわちそれは、（A）共同地の利用が「厳重な規制を必要とせず」「共同地の用益権の大きさは平等である」「利用にあたっては、各自の需要を基準とした」とされた時期（九世紀以降十一・十二世紀）から、（B）共同地用益権に対する種々の制限が付けられ、「農業経営基盤をとして」、「共同地の利用を制限し」たことにより新たな制限が加えられた時期（十四・十五世紀）への移行である。この移行は、中世末期における植民・開拓の進展、特に都市の「手工業の発展・鉱山業の勃興」によって、木材需要が増大し、「特定の価格価値」が起こることに原因があった。他方教授は、（B）ルーシフェント（裁判領主）における共同地の利用を制限し、共同地の利用の制限を「裁判領主」に許されるという「裁判所論」における「特にかしとふるに」という、保護区は「保護区」が成立し、保護区が成立したために、伐採・建築用材の伐採に許可の必要、伐採木材の売却禁止である。更に第三に、（A）裁判領主の役人が「村落共同体の」村役人と共に、「共同地森林用材」を広範囲にわたって検査・監督を行う。「裁判領主」も村民も、森林に対する放火を特別に警戒し、放火者は火刑等に処せられる。これらに共同地森林をめぐる裁判領主と村落共同体の
体との共通の利害が現われている。以上伊藤教授所論から推察すると、共同地森林利用をめぐり「村落共同体」、「帯

判

領

国家」と、同一時期（十五・十六世紀）に同一対応（形態をほぼ同じくする規制）が併行し、相互にほぼ独立して展開し、しかも、これらの規制の目標は両者ともに単に森林資源の確保を目的とする規制のないことになる。

ここでは、共同地森林をめぐる（A）「変質過程」と（B）「歴史的動向」は、各々固有の歴史的意義を持たないかも。両者とも、単純に共同地森林利用上における一変遷と位置づけられるに過ぎず、特質は持たないか、伊藤教授は、両者を単に森林利用上における一変遷とみなし、あるいは違っている。

それを単に森林利用上における一変遷とみなし、伊藤教授は、各々別個の歴史的意义を持つ。「領邦国家体制」における「変質過程」が、共同地森林を含めた、「農民共同体の再編成過程」であり、これにより、中世的村落自治の変質が、「領邦」における共同地森林利用規制のため、ヘルシュタットにおけるそれの持たれる原動力等、各々の観念を生じる見解。したがって、教授の構想の中には、ゾン・「警察」、「領邦警察」、「警察」、特に後のそれぞれを「間接警察」、特に前者がそれを「間接警察」に求め、特に前者がそれを「間接警察」に求め、特に前後者のそれぞれを「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前後者のそれぞれを「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前後者のそれぞれを「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前後者のそれぞれを「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前者を「間接警察」に求め、特に前後者のそれぞれを「間接警察」に求め、特に前者を「間

-64-

-64-
安警察的、後者は「省観的であり、行政的であり、助長警察的」と見たが、これは「警察」の性格の相違を述べたものである。「警察」のそのものは不問に付した。「警察」の概念を定義した十六世紀の警察条令は、「良好警察指導（Gute Staatsfüh-

り）に要求するもの」として「良好警察指導（Gute Staatsfüh-

り）に要求するもの」とされたあらゆる施設の推進を含んだものという指摘した。「これは同様に他の人類の警察を述べたものに過ぎない。本稿は「ポリス」を展開したと述べるが、行政（Polizei）は、近世の領邦における国家建設に仕えるものとされるものである。これについては「警察」概念を定義するための資料を提供している。ただし、国家に対する行政（Polizei）は、国家の観念・国家の目的を実現する手段としての行動である。
「他の実質的な諸目的——政治的・倫理的・功利的——である『実現』を目指すことにあった。この『実質的な
諸目的の実現』のために『行政』は、これに『服する人々にたいし必要に応じて多種多様の義務を課す』のであった
が、この『義務づけること』(Begründung von Pflichten) が右の『社会的指導』を意味したのである。
これが『社会的』指導である。『社会的』指導にとらわれれば、これに『服する人々にたいし必要に応じて多種多様の義務を課す』のであった
『行政』の役目を、予見的計画的に具体的に必要に応じて多種多様の義務を課す。『社会的義務づけ』の役目を果たす。これは『社会的』指導を意味する。この『社会的』指導を意味する。これは『社会的』指導を意味する。
ジッペ以外の「小規模社会集団」における「行政」は、「裁判手続きの形式をとる。」
一つの裁判手続きの形で進行
し、裁判から形式的に分離されることになったのである。こうなってくると、「行政」は「既得の主観的権利」に
よって制限を被ることもある。次に、「小規模社会集団」においても、「既得の主観的権利」に
制限付加的に作用しうるが、しかしそうでないとたわめてない。さらに、「小規模社会集団」においても、「既得の主観的権利」に
あっても、ことのほか活発な展開を見せた。」

次に、「小規模社会集団」においても、「既得の主観的権利」が、「行政」にたいし
の独占を承認した。これだけでは、いかに活発な展開を示すか。こうして、もしそ「社会集団」における「行政」中、
身分的諸特権の支配と裁判が、「行政」の身分制的性格とを取るに至らないことか。次に、

the 1以下、「行政」を、「行政」の概念を指摘し、その歴史的展開を概観した上で、早速森林令第一条の解釈に入ら
ねばならないが、ただこれに直を置く前後に本論の一層の理解のために次の三節を述べておきたい。

第一は、「本稿の農村共同体の用語である。本稿はこれを、あたかも都市の市民団体が、「都市共同体」と呼
されると同じ単純な意味で、農村の或る領域に根を下ろした、「土地保有者たちの特定の人々の範囲」が「都市共同体」に
とらえたい（土地所有の規範・共同体）に呼

せられると同じ単純な意味で、農村の或る領域に根を下ろした、「土地保有者たちの特定の人々の範囲」が「都市共同体」に
とらえたい（土地所有の規範・共同体）に呼

れると同じ単純な意味で、農村の或る領域に根を下ろした、「土地保有者たちの特定の人々の範囲」が「都市共同体」に
とらえたい（土地所有の規範・共同体）に呼
ある土地保有者たちの定住形態について言えば、これらは、「農村（トルフ）でもあるし部落（ウィテラー）や散居（「莊宅」）である。これにかんして大塚久雄教授は、「共同体の世界史上に「ゲルマン的」形態の共同体を位置づけられるに際し、「ゲルマン的」共同体の定住形態を「土地占取者の隣人集団」としての「村落」を捉え、しかもこの「村落」における個々の土地保有者を、本稿も「村民」（ゲノッセ）と呼んでおこう。ただ教授の場合、「ゲルマン的」共同体をめぐる論述は実際はもっと、「耕区制」の下の「混在耕地制」、「村落」―いわゆる「家地」と同じ意味のものである。そしてこの「農村共同体」における定住形態は、「村落」を含む「余裕ある用語法」として比較的広く解釈した。以上のかぎりで

「耕区制」、「共同地」、「共同地」を構成する「形式的平等」は、教授自身これを「何よりも「耕区制」を基礎とし、そのうえに具体化され」たものとする。例えば「ゲルマン的」共同体は、自然の耕地等の小規模においてだかかれた範囲で断わりつつも混在耕地存在を指摘したように、大規模な混在耕地（したがって「耕区制」に属する）における定住形態は、「村落」を含む「耕区制」を含む「ゲルマン的」共同体が支配的とされるが、これを一般化するのには問題である。
森林犯罪告発人制度管見
（若曾根）

に成立・展開し、極く僅かに存在したにすぎない領主直轄領内森林団体（いわゆる「ホーフマルク」）は除き、一層具体的に農村共同体は基本的に「ラント裁判所団体」として出現した。「農村共同体」の国制は同時に「ラント裁判所」のそれであり、村民は絶えずラント裁判官と交渉を持っていた。以上の如く、ディロール「農村共同体」がラント裁判所組織一層具体的に通してまとめ上げられて国制上の一つの「人的団体」（eine menschlichere Verbindung）を構成した。一層具体的に

わらのが「ドルフ」である。本稿では「農村共同体」の定住森林形態の相違やこれに基づく「共同体」の建設の問題には立ち入らず、「農村共同体」を「ラント裁判所組織」を構成した

第二に、「森林犯罪告発人」による告発の対象となる森林犯罪に対する問題は本稿では扱わず、これに基づく「共同体」の建設の問題には立ち入らない。以上に述べた如く、ディロール「農村共同体」がラント裁判所組織を構成した。「農村共同体」がラント裁判所組織を構成した

第三に、「森林犯罪告発人」による告発の対象となる森林犯罪に対する問題は本稿では扱わず、これに基づく「共同体」の建設の問題には立ち入らない。以上に述べた如く、"森林犯罪告発人"は「農村共同体」を構成し、ラント裁判所組織の一部を形成する。この場合、「森林犯罪告発人」はラント裁判所組織の一部を形成する。この場合、「森林犯罪告発人」としての役割を果たす。これに基づく「共同体」の建設の問題には立ち入らない。以上に述べた如く、ディロール「農村共同体」がラント裁判所組織を構成した。

一方、五年森林令第十六条において樹木を伐採し部落が何処に所在するかを示す。これに基づく「共同体」の建設の問題には立ち入らない。以上に述べた如く、ディロール「農村共同体」がラント裁判所組織を構成した。
論

貯蔵方法にたいする監視・森林開発（密漬・灌漬）の禁止である。森林利用規制の諸形態は決定を以上に止まらないが、これら四つに従ってできる規制形態は当時、もあたる領邦君主（政府）の森林利用規制の最も基本的な形態と称して過言ではない。特にそこで注目すべきは、第一に、伐採・搬出行為に止まらず、村民各家における樹木貯蔵にたいして政府（森林官）の監視の眼が行き届いたこと、第二に、森林開発が（罰金額から推して）厳重に警戒されたことである。前者は、村民の日常生活にたいして、木材の「良い」貯蔵を目指す政府の自覚を誇わせる。

第三に、ラント裁判官職と君主直属の共同地森林官職との連繋である。森林令第一条前段は裁判官が村民の「森林官」告発人の選挙に同意すべきと、後段はやはり裁判官が告発人を任命すべきと定め、森林官は告発人の任命を自覚を誇わせる。これにかかっては、第一に、森林令の以下の諸箇条に注目したい。先ず、告発人は森林令違反事件を（選挙）発すべきである（第一条前段）。次に、裁判官は森林令違反事件を（選挙）発すべきである（第二十七条）。

事件を現場の至る所で即時、その結果から得た（彼の）裁判官の（選挙）発すべきである（第二十七条後段）。最後に、各村民は、共同地森林内で起る自己の（森林令違反被疑）事件にかんし、当該（選挙）発すべきである（第二十九条後段）。これにより、裁判官職を森林令違反事件の連繋が求められる。第二に、森林令違反被疑事件の裁判開始手続に注目したい。前述森林令第二十一条に従えば、森林令違反事件にかんする裁判官自前の審理の際、森林官の同席すべきであるが、これは第二十一条右述箇所に引続き次の如く述べられることからわかる。
森林犯罪告発人制度管見（著者名）

官が告発人のために（von unserm wegen）それ（ルール実施のため）を告発する（begehrten）べき。これからの
事情を考慮した上で、森林犯罪告発人の裁判は、森林管轄官が（森林管轄官執行事件）から違反事件の告発を直接受理するか、は
告発人が先ず裁判官に告発を行う。次いで、裁判所が告発内容を伝達するか、は
として、この場合いずれも裁判官が、裁判所に直ちに告発を受理することになる。か、裁判開始となった場合、裁判官は告発人の告知を受諾する
うえ、裁判間の特別裁判所（strafgerichte Verwaltung）の開設を請求する（或は命令する）か、さもなら
のものに実質的にも裁判所（strafgerichte Verwaltung）における（この場合森林裁判所）に出席を義務づ
けられることがになる。か、裁判開始となった場合、裁判官は告発人の告知を受諾する（或は命令する）か、さもなら
のものに実質的にも裁判所（strafgerichte Verwaltung）における（この場合森林裁判所）に出席を義務づ
けられることがになる。か、裁判開始となった場合、裁判官は告発人の告知を受諾する（或は命令する）か、さもなら

以上により、裁判官職・君主直属森林管轄官職間における職務上の連繋の存在は明らかとなる。この連繋に森林管轄官
職の加わることで、告発人職・裁判官職・森林管轄官職間にて、森林犯罪告発
森林犯罪告発人制度管見（～）（若曾根）
sollen die Zwen, so also Erfahrungswesen, bestätigen, und ob die unternehmerische Initiative mit den
richtigen und unrichtigen Maßnahmen verknüpft ist, damit die Geschäftsführung berechtigt und die Richter
authentisch haben, damit solcher unternehmerischer Ratschlag und mangelhafter Werdend und welcher Stillschweigen
wissen und willen ohne Richters Cäsars alle ist zu sein und ihre und deren Erfahrungen und Erfahrungen, die in
Unserer Zunft erfahrener, von Ernst, das die nachparschacht in ihnen wichtigsten ohren mit

Der > [34] 1) Deutsche Stunde.} (1)
(9) T. W. "A." S. 96. (Walladersehen und Ortung, so er ist nach der Perspektive zu Naters Freischem)

(8) T. W. II. S. 37. e (Der nördliche Theil des dorfe zu Trubachterland, 1877, S. 17.

(7) T. W. II. (O. W. II. 3), 1877, S. 17. (Gemäis er Nachbarschaft zu Inziggen enhart, Ordning des Bachließense Ortungs.)

(6) T. W. "A." S. 94. (Gemäis er Nachbarschaft der Lehenssan und guild zu Thaur Holzstuhl und dargber

(5) T. W. II. (O. W. II. 2), 1877, S. 126. (Panwil und Holzer belangen, die er ist nach der Perspektive von Trubacher, 1877, S. 126.)

(4) T. W. "A." S. 94. (Walladersehen, a. O. Belieben, NR. XXVII. 1885. (Landersehen, Trubach.)

(3) T. W. II. (O. W. II. 3), 1877, S. 57. (Aber der Flur, 1877, S. 57. (Aber der Flur. 1877, S. 57.)

(2) T. W. II. (O. W. II. 3), 1877, S. 57. (Aber der Flur. 1877, S. 57.)

(1) T. W. "A." S. 94. (Walladersehen, a. O. Belieben, NR. XXVII. 1885. (Landersehen, Trubach.)

so sollen die Richten Gewalt haben, selbe zwem ans heben zu erzollen und densten das, die vorsteer, an der zu

Landschätzung. (Z. W. II. 3), 1877, S. 17. (Gemäis er Nachbarschaft zu Inziggen enhart, Ordning des Bachließense Ortungs.)

(9) T. W. "A." S. 96. (Walladersehen und Ortung, so er ist nach der Perspektive zu Naters Freischem)
Der Strafzettel haben der Unternehmer haben wir gleichommen, Welcher mehr sich dann im Erlaubt und ausserhalb
Chinesische Akademie der Wissenschaften zu Wien, Bd. 125 (1891).

H. Siegel, Das Pilzclophumige Rüken und den Zähligungen und sein Verhältnis zum Rükenbahncliche der Osterr.

Brunner, Schwerin, a., S. 644, Anm. 43.


I. Vorwärtszüng der Bestränke (Schreib.)

W. Elbez, Der Pilzhafte als Geheimpunkt und Geschäftstempel der den deutschen mithilfeleiten Stad.

Knap, Das all die Rührerlehen Kriminellenstehlen die Kriminal-Richter des Kriminal-Verhältniss der Kriminal-Zeitwirtschaft. (Stichhacker)

E. Schmidt, Einbinden in die Geschichte der deutschen Stärkeverhältnisse 3. Aufl. 1963, S. 64, 468

die Fünftuk in unserrn Phänomenenzustellungen lassen und vor dem Platz zu Rechtverhältnissen bewahren...

Wor aber die Keitschierphileler oder Richter in ehntehin der Stärk sahme Kriminalverwunden mit...
論

一 さて先ず一五〇三年の森林令の前段である。これによればラント裁判官は、領邦の一官吏としての「森林犯罪者告発人」を民衆の選挙に委ね、自らは単にその同意をは確認に止まるべきであった。領邦君主（政府）は農村共同体の「警察」、「仲間警察」と呼ぶような組織・作用を巧みに活用しようとしたのである。すなわち、農村共同体の「警察」、「仲間警察」を置き、これが森林犯罪者告発人の「出発点」である。伊藤栄教授の次の指摘もここに参着されるよう。「農地（に関する争訟）」には農地役人の「アルメンデの犯罪（をめぐる裁判）」には役人の証言が最も重ねられたのである。こうして、民衆に「森林犯罪者告発人」の選挙が委ねられたのは、一般に領邦君主（政府）が農村共同体の「警察」、「仲間警察」の探索・制圧が農民の手に委ねられたのは、一つは「領主（幕府・各藩）」の警察権、「不徹底」である。このことは、「仲間警察」の実態が如何なる観念に支配されているかをティロール領邦を含め広く一般的に概観し、次に（六）、「仲間警察」が果して如何なる観念に支配されているかを提問して見たかったのである。それによれば「警察」の起源を中世都市に見ても、「仲間警察」の形態に大きな影響を与えでかったのである。さらに、都市警察は農村警察と全く異なったものを「警察」の一形態であったし、やがてその発展とともに「町村警察」の形成が大きく影響を与えてきたのである。
森林犯罪告発人制度管見（若谷俊）

観念には二種類のものがあった。第一は、警察は「裁判権の附属物であり」「既発事件の処理を主要任務」とする。

それは「裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。これにたいし第二は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第三は裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。これにたいし第四は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第五は裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。これにたいし第六は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第七は裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。これにたいし第八は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第九は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第十は裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。これにたいし第十一は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第十二は裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。これにたいし第十三は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第十四は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第十五は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第十六は裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。これにたいし第十七は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第十八は裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。これにたいし第十九は警察は「べき一切の危険を想定し、その予防のために情報を集め、実力を行使する予防活動」である。これにたいし第二十は裁判所にひきだすべき人を、実力によって追及し、逮捕すること」である。
論

都市警察の変遷は、都市が「団体（ゲノーシンシュプト）」からやがて「法人（ゲルベルシュプト）」へと移行するWheelchair Cerebral Palsy

こと、つまりUniversitas Civilis（市民の総体）と並んでかつその上位にCivitas（都市）が、すなわち独立の行文主体としての都市が出現することと関連する。ここで、威能教授自身により「警察法の概説」とし、「一簡明なものの一つ」と高く評価されたE・レーニングの所論が参照されるよう。すなわちレーニングは、中世におけ

る警察の担い手が教会・都市・領邦の三者であったとし、このうちとりわけ都市の警察について次のように述べた。「都市が、商業生活及び『教会に代わって』精神生活の場となり、中心となるにつれて、ますます、都市住民の

視及び規制、度量衡の確定、良質で濁物のない食用品の配慮、であった。後代ますます範囲を広げた都市諸官府の

活動は、十五世紀には広範囲に及ぶ立法と行政を生み出していった。こうしてレーニングによれば『現代語で内務行政（Inneres Verwaltung）』と称される組織・作用が『中世』の国家ではなくて『中世都市において』初

めて成り立つているのである。このレーニングが所論における都市警察は「自治的な警察」、『私的な警察』とし

ては描かれていない。しかも都市警察の『政府・警察・官庁・警察』としての位置づけ（『組織された警察』）が

都市警察研究上、普通に指摘されていているところである。この点から見たならば、威能教授の中世都市、中間警察の

観は確かに注目すべき成果である。しかしながら教授は、中世都市警察の変遷に留意せねばならなかった。都市

警察は官庁を通じて、より官僚的に行使されることがある。こうして、あたかも立法の面で都市住民たちの約定（Gemeineregelung）に代わって

が、都市参事会立法（Rechtsstatuten）が成立した如く、「中間警察」に代わって言わば『参事会警察』が形成された。
此のような「参事会警察」の組織が中世都市の告発専門官（職業告発人）であるが、これについては後に述べる。

かつてG・フォン・ベロウは、十六世紀における「警察」の形成における都市警察が「模範的」な働きを果したと述べたが、この場合の都市警察の基本形態は「参事会警察」ではなく、むしろ「都市警察」の形であり、参事会警察の役割は都市における「警察」の役割を務めたとされている。故に、都市における「警察」の役割は、都市の管理を担うために、参事会警察がその役割を務めたとされる。

したがって、農村住民の維持と村の機能を維持するために、参事会警察は農村の管理に大きく関与した。特に、ホーリントンにおける、参事会警察が農村の管理にあたる役割を果たすことは、都市における「警察」の役割を果たすために不可欠なものである。

なお、参事会警察の組織は、都市における「警察」の役割を担うために、都市の管理を担うために不可欠なものである。特に、都市における「警察」の役割を果たすために、参事会警察がその役割を務めたとされている。故に、参事会警察の役割は都市における「警察」の役割を務めたとされる。

したがって、都市における「警察」の役割は、都市の管理を担うために、参事会警察がその役割を務めたとされる。
このページには、日本語のテキストが含まれています。これについては、テキストを読み解く助けが必要です。
森能犯前告発人制度管見(一)
(著者:増村)

forest(gesellschaft)

森能犯前告発人制度管見(一)
(著者:増村)

forest(gesellschaft)

森能犯前告発人制度管見(一)
(著者:増村)

forest(gesellschaft)

森能犯前告発人制度管見(一)
(著者:増村)

forest(gesellschaft)

森能犯前告発人制度管見(一)
(著者:増村)

forest(gesellschaft)
森林犯罪告発人制度管見（若曾根）

同様に「野番」の「不法な職務行為」に法的意義を認める必要がある。村内を走る「野番」は、村の行政・防犯に重要な役割を果たしている。しかし、野番の欠席や誤作業は、村の安全に重大な影響を及ぼす場合がある。

つまり、野番は村の安全を保障する存在である。その重要性から、野番の欠席や誤作業を法的に処理する必要がある。このように、「野番」という職務行為は、村の安全を守ることに不可欠である。
他の事項にかかわる被疑事件の告発をも行なう番人として、「野番」職に相当したものを言える。後代も両者は似通った職務の村役人として姿を見せた。ここには形式的な「野番」の存在すら認められるようである。これもともかく、実質上「野番」職に相当する職務にあたった役人がいたことかほほ疑いがない。このように見れば少なくともトリンス村にとっては、一五〇二年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たな出来事ではないか、一五〇〇年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たな出来事ではないか、一五〇二年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たなる出来事ではないか、一五〇二年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たなる出来事ではないか、一五〇〇年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たなる出来事ではないか、一五〇〇年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たなる出来事ではないか、一五〇〇〇〇年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たなる出来事ではないか、一五〇〇〇〇年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たなる出来事ではないか、一五〇〇〇〇〇〇〇年以前イノ渓谷地域（北ティローロ）の農村共同体における設置は実質の上で決して突然の、全く新たなる出来事ではないか、一五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　
せてこれと「森林犯罪告発人」との関連を見てきたが、実は、「森林犯罪告発人」の設置が領邦政府における「官憲思想」の現れとするとき、これとの関連で叙述される「仲間警察」（その一つである「野番」）の問題はその個々の形態を論及することです。これを含む中世ドイツ語圏における「仲関警察」（そして「野番」）の形成の歴史的意義は、この「仲間警察」の基盤を明らかにすることによってこそ、充分に考察できると思われるのです。筆者は中世ティロールにおいてそれを明らかにすることによってこそ、当面重要なことだけに、これ自体の問題に眼を向け方が、「仲間警察」の個々の形態の描写に多くの紙面を費やす必要はないと（第二に「仲間警察」の基盤として「ゲノ・ッチャト」の原理である。以下ではこれを再述したい）。その場して再詮し中世ティロール歴史ソーティーの基盤を考察し（von gerichts wegen rügen）の事情である。ナラ、ラント裁判官Friedrich Gott Smiecherの質問に応じてトリンス村の古文書を見解るのと同時に、彼straightforth, frantopon, ezchil, rüger各人）は、どこかある処で、町物などに、「被害を加えつつある家畜または家畜を発覚する」とは、「家畜の被害を加えつつある家畜を発覚する」とは、「家畜の被害を加えつつある家畜を発覚する」とは、「家畜の被害を加えつつある家畜を発覚する」とは、「家畜の被害を加えつつある家畜を発覚する」とは、「家畜の被害を加えつつある家畜を発覚する」とは、家の被害を加えつつある家畜を発覚する」とは、家の被害を加えつつある家畜を発覚する」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」とは、「家畜の被害を加える」と是のことを、「裁判所（ないし裁判区）の名において告発する」に言えるもので
発行行為は、南ディモール地域では通常定期ラント裁判集会において「判決発見人」（richterswüren）の職にある者が実際に行っていたが、ここではラント裁判集会及びフォーサーク裁判集会における、これら集会に欠席した集会出席者がそして特別の刑事事件で告訴者を告発（richten）すべきであったのである。これに村役人が「裁判所」（richterswüren）の名において起こったことが、疑いがない。トリンス村役人が「裁判所」（richterswüren）の名において告発を行なった場合も変わりはない。ただ、ディモール農村裁判所がない場合でも特に頻出する「Nachbarschaft」（近所）であり、東側の村役人が「裁判所」（richterswüren）が去った場合でも、村役人が農村共同体の名において告発を行なったのである。ここにG・ラントヴェル教授指出の「人民告発」Volksschutzのことから、比較的古い法律制度が受け継がれている。共同地損傷事件が「村役人」によって告発された場合、それは「村役人」Nachbarschaftによって告発された場合と同様である。
説

名において告発あるいは告訴に携わったことになる。換言すれば、「村民仲間」（「障人」）が「村民仲間」（「障人」）の名において告発あるいは告訴を行なったのである。これは次のことを指すものに他ならない。すなわち、告発者

は、共同地損害者の「村民仲間」（「障人」）として、まざまに自己の名において、共同地損害者の告発・告訴

を受けており、共同地被った損害について自己を直接の被害者と感じ取っていたのである。これが、他の自己

の身体が損害を受けた如く、共同地被った損害について自己を直接の被害者と感じ取っているのである。すなわち、告発者

は、共同地損害者にたいし自己の名において訴えを起こした。このことの中にまさに「ゲノッセーシャフト」

原理が働いていた。以下はこれを敷衍したのである。

六

こうして、農村「仲間警察」を支配した観念の問題に移った。ここでは「仲間警察」ではなく「仲間警察」を

支配した観念が重要である。ただ第一に、農村共同体は当初から一箇の「ゲノッセーシャフト」以下これを

組織と捉えている（「行政」と同じく農村共同体の「法創造・法発見」言葉の「仲間警察」は、「仲間警察

の構成員」の視点をとる。宗教的・文化的・経済的・社会的・法的・政治的諸目的を果たすための人的団

体）と見、亦、それを「全構成員による集会機関と（一部構成員から成る）執行諸機関」との間に求め得るなる

観念を指すことになるからである。こうして、「仲間」を支配した観念の究明に進むこととなったが、その前に当然、

「仲間」の意味を明らかにしておかねばならない。さて、「仲間」は一応外的で内面的と二重の意味を持つと言える。先ず外面的意味である。これは、「仲間」と

は「外人」（Auswärter）にたいし閉ざされた或る人的範囲（この場合無論、「仲間」が「空間的な意味で村に


- 94 -
「仲間」を捉える仕方はわが国で数々見受けられる。例えば、共同志 дерев組の個人主義を基にする「形態的平等」（井上・田中教授）、「仲間」を捉えた仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

しかし、『仲間』を捉えた仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

仲間を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）、「共同志 дерев組の仲間」を捉えた仕方は「伝統的な特定生活水準の均等・均質性」（住谷・徳教授）。

したがって、「仲間」を捉える仕方は「応用的平等」（江守・五ヶ教授）、「共同志 дерев組の仲間にを見されている legitimacy」の利用の中を現わす。これにたいして、gemein は「あらゆる形態の人的結合（Personenver-
森林犯罪会発人制度常見

七

さいでいよいよ「仲間」を支配した観念の問題である。筆者はそれを「損害の衡平分配」（gerechte Schaden-

- 97 -
たかを多少長くはなるが労を厭わず紹介したい。それはこうである。村民がヘルシーフトのことわざで一人ひとり
個別に取り扱われるときでも、村、そのもの、はその人の基礎から見て一つの均等的な仲間関係の団体であった。村では従属原理でなく対等原理が目指された。他方村内の村民仲間で、もしくは「優越者」であり、或る者は「劣等者」
と比べて、社会的地位の点で村内で重きを成した。例えば、二〇頭の牛を牧放させ得る豪農は、二頭の貧弱な牝牛を牧人に委ねる一分の一農・四分の一農
者はその仲間であった。確か豪農の方がどちらかと言えば、諸村役人の中でも、村長職を引き受け、小農
闘争にあたった。しかし、村全体として、中でも、土長職の如き無報酬の名誉職、上級職よりもや
し、下級職ではあるが特定の報酬と結び付いた「前記の如き」職務に就任するのは村内において、或る種の均衡（Ausgleich）
がつくられていることを示すものである。まさに、この均衡であることが、たとえ村民個人の間で充足度
或は困窮度が相違であったとしても、村の生活を村民にとって堪えるものにする。同時にこの均衡は損害の
衡平分配原則とも一致する。すなわち、村役人職が相違に分かれたのは、村民において支配した・損害の
利用において村民の或る者のみが利益を享受する或る者のみが損害を被ると言うことのないことを指す。損害の衡平
分配は、すでにギルケの指摘通り、共同体の利用において、各仲間（共同体構成員）は常に、自分の同意な
ににおいて、彼の仲間ないし彼と同階級の仲間よりも不利な取扱を共同体から受けない権利をもったところに現われ
たが、近世日本の村落にも知られ、信濃国八重原村三部落の分水権行を記した享保三年（一七一七）三箇用水証
分身の所有地の上を通って当該の土地へ行くことができない者は別。両方の土地の上を行くことが許される。し
かし（そのときその隣人の土地と別の隣人の土地の）二つの土地が隣接する場合は、彼は（両方の土地）
向こう側（の隣人の土地）に、そしてそれからもう一方の車輪をこら（隣人の土地）に（それぞれ置いた）隣
人の土地を通ることとなり、こうすることによって彼は、一度に一方の隣人のみ突き当たる損害を負わすこと
にならないのである。 יותרו
（b）Käfeler裁判区（南ティロール）の判告法（一五八）。一耕地の中の通路、二人
の隣人の土地一耕地である者が牧草地であるが、が相接している場合に、そこに車輪が通るとき、車輪は両方
の土地の上に同時に進まなければならない。それぞれ置いた（隣人の土地）に通って進まなければならないポ
持したときは、この限りではない。それぞれ放置して（隣人の土地）に進むことはできない。一方の隣人は両方
の隣人にあるべきは、（と別のこと）について証人または文書を所
決発見人の面前に持ち出され聴取されるべき。ザルツブルク大法官で
ザルツブルク裁判区の判告法（一二七）。一質問。所
る者が下肥を連ぶため及び他の必要のため彼の隣人の土地の上を進まなければならない場合に、ど
ようにメンズされるべきであるか。判告。所
彼が道路から車で彼の土地へ行く場合に、彼の（隣人の）二つ目の通路
に、通行のため他の土地に損害を与えることができない。そこで第二次の二点を指摘しておきたい。第一に、
ほどにかかる損害の皆平分配が生じたのは、多かれ少なかれ混在耕地（共同耕地）を保持した中世村においては村
を結び附ける道路は略別として、村内道路（農道）が道路として明確に他の土地から区別されていること
に
よれた。村内道路は「耕地とは全く分離されているのではなく耕地全体との関連を失わない」とされるのである。

第二に、これが表面重要だが、右の諸説より推察できるように、通行によって損害を被ったのは耕地であって、土地自体が独立の権利義務の主体となり、いわゆる権利の「不動産化」現象、したがって土地自体が損害を被るものである。パーザー教授が、損害の衝突分配の具体的事例を挙げたのは、もっぱら以上のごとおき相互通用にかんしてのみで、他方教授が村において支配された、損害の衝突分配の原則と述べる以上、教授は「土地の利用」、もしくは「村生活における支え」を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。それが共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまでは共同耕地において更に具体的に如何に展開したかは、夥しい数の判例文書や村規則文書を丹念に読み進むうちにわかるかもしれない。これまではなくある。
共同地は、各農民の個別利用地（保有地）附属の「予備利用地」（Grundstückreserve）利用したことからくるものに他ならない。個の「共同体」構成員が共同地に対して有する権利は「私的な権利」なのである。この「私的な権利」の現われが、共同地の「自家の必要」に基づく利用である。各共同地利用権者は「利己的利害」は後述の如く、共同地利用の利益は「自家の必要」が充足されると言うことの利益、「自家の必要」という家にかんし誤った概念を生むがゆえ、本稿はこの概念を使わずに各農民の共同地利用は「自家の必要」に即したものと見、共同地利用上の利益は農民「自家の必要」に基づく利用である。すなわち、伊藤淳教授は共同地は当初「すべての農民の平等なる利用」を意味する。次いで、後代には共同地利用は規制され平等ではなくたと述べる。ことで注意すべきは「平等」なる共同地「利用権」であることをある。各農民は「仲間」
森林犯罪集団利用制度管見（若曾根）

一人として共同地を利用した。この法的表現が各村民の共同地「利用権」であり、共同地において「仲間」懸想が

維持されるかぎりで「利用権」は当初から後述「平等」であった。利用権そのものが規定を被ることはない。

規制を被ったのは「外人」であった。以上にたいし、共同地の事実上の利用までが平等に行われることで

ついては、「階級格差は時の経過とともに広がって行き、その上共同地利用は「自家の必要」を満たそうとするものだ

利は形式的に平等でも「実力のある者」と「ない者」との間に収益の内容が実際に異なる了。各村民が「自家の必要」

存在するものであり、したがって「損害の実現」が悪くて見れば、「仲間懸想」は共同地利用の本質に由来する。たと

損害が各村民にそれとして自覚されず、このため共同地利用規制が必要となかったのは、共同地がもたらす利益

量に余裕があったことによる。

第二は、共同地利用団体の「集団利用」（Kollektivnutzungseis）にかんする問題である。既述の如く共同地利用の理解

にかんし誤まった懸想を生む。村民各人が「自家の必要」に即して共同地を利用することから生まれる利益が、

の言葉に、「集団利用」に言及するとき、ますますその感は深い。しかし、「利己的利害」と考えるよ

ている不平等、」「マルクス主義の懸想」などの土地利用団体の・利益者の私

の利益」にたいする「集団利益」・「集団利用」の概念を見ることはない。

共同地利用規制の成立過程における
でも、各村民が他村民との関係において土地を利用する事実が基本のありであり、そこには農村共同体の「集団利害」がある。村民「全体の損害」のの観念は働いている。

説

構造そのものから自ずと生まれた。各村民は、他村民の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づいた土地利用の自由を保障した。この事実は、土地利用規制が実現することと、村民の「自家の必要」に基づく土地利用が実現することである。これにたいして、自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用が実現することである。これにたいして、自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用が実現することである。これにたいして、自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつつ、しかも自身の「自家の必要」に基づく土地利用を承認しつし
保有地を持つ「構成員」にあると認識された。いわゆるそれは保有地の規模を結び付けるものとは解されなかった。したがって共同利用権者の持つ利用権の行使がそのまま利用権者の「各自の必要」の実現上の充足を意味するのであつた。ところが時の経過とともに、共同利用権は保有地を持つ「構成員」にでなく、構成員の「保有地」に直接に附着したもの、そこに根を下ろしたものと認識されるに至った。こうなると当然、保有地規模の相違が利用権者の意識に基づくエコシステムの大きさが増大することになった。すなわち、保有地の大きさに応じて共同利用権の大小を保有地規模に拘わらせることが必要である。このような、共同利用権の規模の変化を導いた要因は、利用権が直接保有地に附着したこと、更に各利用権者が共同利用権が結局「各自の必要」を充足させ得ないことを村民が経験した後になってしまわれたものである。各村民の生活経験を通じて知るべきものである。
論

言うに及ばず、『利己的利害』との『利己的利害』にかんしてである。この点についててはバーダー教授の次見解が役立つだろう。第一は、国益の存在をその用語の上から徹底させたものである。そこにおける問題意識は次の通りであった。（中世）の時では支配者の個人的白目的な国家制度が実際、強度に個人的な剣印を押されていて、その結果、ドイツ史の最初期から（一九世紀に至る）諸世紀の変革の中にある国制諸形態の変化を通じて、ゲルマン的国家制度は、時代のときどきの国家指導者たちに現れた変革極まらない人的資質から超然とした「公共的利益」（Gemeines Bate）を超えることができる。それに、このようなメルク教授の所論に依拠したとすれば、バーダー教授の前出見解には、「ダルフガノッセンシフト」を最初期から貫く「共の利益」（Gemeines Bate）を超えてきたものである。パクレター教授が意識的に「集団利益」が「ダルフガノッセンシフト」を最初期から貫く「共の利益」（Gemeines Bate）を超えてきたものである。パクレター教授が意識的に「集団利益」が「ダルフガノッセンシフト」を最初期から貫く『共の利益』（Gemeines Bate）を超えることができる。これからの考えは、各『仲間』はメルク教授論に言ければ「特殊利害」の担い手であること、各『仲間』の利益は「共
共の利益には相容れないものとする考えであり、「公共の利益」と「一部利害」とは不可避的に「衝突」させるを得ないとする考え方である。これは結果的に「公」・「私」の対立を通じて解決しようとするものであり、利害の表面的・露骨な対立を基準に、利害の実体を考慮することを必要とする。「利害の利害」・「集団利害」の用語は誤まった概念を生む。それでは、共同体利用の正しい理解は得られない。共同体の利害を総合的に判断して各利害者の実体を考慮することは、共同体利用における各利害者の「自発的必要」に基づく利害によってもたらされる利害以外に、共同体利用の正しい理解は得られない。「ドルフゲノッセンシャフト」（共同体の利害）を考慮する余地はない。「ドルフゲノッセンシャフト」と「共同体の利害」の体験を経ての課題を附与しようとするものではない。共同体利用規則の成立を「仲間」構造に由来するものであり、利用規制を行う主体は具体的な「仲間」自身であって抽象的な「仲間」ではあらない。「仲間」は他方の「仲間」は一方で皆総体としてAllmendeの処分を為し、之が利用方法を定める」たと考える必要もない。「仲間」自身であって「仲間」ではあらない。「仲間」自己であって「仲間」ではあらない。「仲間」内・間の「相互的拘束」の実現が「仲間警察」の作用である。元来各「仲間」を自己の経済の為に「仲間警察」・「仲間警察」の意義が歴史的であると言えるのは、時の経過のないに「仲間」が、元来各「仲間'


K. S. Bader, Rechtssprachliche und Schichtung der Germanischen Inschriften, 1923.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.

S. 3/4. 5.
1980, S. 315

(1) Tressch (Troll, Vindsiqna)  Waldordnung, M (Waldorfen) solten auch, weren si anheum stem und in


(3) van allen beyessen dje toder schen. (Grimm, Weisheim, II, S. 394)

(4) Westermann zu Dres (Untersommer, 1453), aus einer Abschrift von 1535 (Demarch, Vermendal der Richer

(5) (Grimm, Weisheim, I, S. 614)

and van allen beyessen dje toder schen. (Grimm, Weisheim, II, S. 394)

als dies kannerschelen zu vertheuwen, von messen, von ursiern, von vertheid, vnglich holt bachen, ynn zappen.

helvetiern messer zucken, bliehde woonen, marcken zu stieren ander alts zu eran. Ynn von visser h.

die schelten vnd hollisiehten vff it eyde, abe vct todel werct, das yvo das vortheuchen, es yv van sc.

Westermann zu Dres (Untersommer, 1453), aus einer Abschrift von 1535 (Demarch, Vermendal der Richer

(5) (Grimm, Weisheim, I, S. 614)

and van allen beyessen dje toder schen. (Grimm, Weisheim, II, S. 394)

als dies kannerschelen zu vertheuwen, von messen, von ursiern, von vertheid, vnglich holt bachen, ynn zappen.

helvetiern messer zucken, bliehde woonen, marcken zu stieren ander alts zu eran. Ynn von visser h.

die schelten vnd hollisiehten vff it eyde, abe vct todel werct, das yvo das vortheuchen, es yv van sc.

Westermann zu Dres (Untersommer, 1453), aus einer Abschrift von 1535 (Demarch, Vermendal der Richer

(5) (Grimm, Weisheim, I, S. 614)

and van allen beyessen dje toder schen. (Grimm, Weisheim, II, S. 394)

als dies kannerschelen zu vertheuwen, von messen, von ursiern, von vertheid, vnglich holt bachen, ynn zappen.

helvetiern messer zucken, bliehde woonen, marcken zu stieren ander alts zu eran. Ynn von visser h.

die schelten vnd hollisiehten vff it eyde, abe vct todel werct, das yvo das vortheuchen, es yv van sc.

Westermann zu Dres (Untersommer, 1453), aus einer Abschrift von 1535 (Demarch, Vermendal der Richer

(5) (Grimm, Weisheim, I, S. 614)
Hubgericht zu Cappel. (Schwarzwald bis zum Rhein) (Vor 1540). Item man spricht zum rechten, wenn die rechte verkündet werden, so sollen die forstler rügen, die sollen auch geswarn forster sin und vorn hubgericht sweren. Item die forstler sollen rügen einen ussman umb 13 unt ein innen umb 2 schill. pfenn, und im nacht lib und gut. (Grimm, Weithümer, I, S. 422.)

Windern und Weinsahr (Westerrwald zwischen Lahn, Rhein, Sieg). (1628). So tretten letztlich her für die veredelte forstler und erzählen nach einander die rügen wegen den gehützten und der gebäuden, danach die Feldfrühen, wie oben ernannt sey, so alle nach einander in das Buch geschrieben werden. (Grimm, Weithümer. I, S. 606.)

Rechte von Cappel. (Schwarzwald bis zum Rhein) (15. Jh.). Item die rügung sol ein banwart thun by gesworene eide, vff das nehest gerichte zu summichten, vor einigen buren gerichtet, und die ander rügung sol er thun in der wochen vor winachten, findet aber me so sol er rügen zu winachten, so man heimburger und banwart setzt. (Grimm, Weithümer, I, S. 419.) Vgl. v. Maurer, Geschichte der Dorfverfassung, II, S. 100.

In den Jahren 1961 und 1962 wurden über 200.000 Arbeitsstunden in Kärnten eingespart, was einer Sparquote von 30% entspricht.


Im Jahr 1961 wurden über 200.000 Arbeitsstunden eingespart, was einer Sparquote von 30% entspricht.


Im Jahr 1961 wurden über 200.000 Arbeitsstunden eingespart, was einer Sparquote von 30% entspricht.


Im Jahr 1961 wurden über 200.000 Arbeitsstunden eingespart, was einer Sparquote von 30% entspricht.


Im Jahr 1961 wurden über 200.000 Arbeitsstunden eingespart, was einer Sparquote von 30% entspricht.


Im Jahr 1961 wurden über 200.000 Arbeitsstunden eingespart, was einer Sparquote von 30% entspricht.


Im Jahr 1961 wurden über 200.000 Arbeitsstunden eingespart, was einer Sparquote von 30% entspricht.


Im Jahr 1961 wurden über 200.000 Arbeitsstunden eingespart, was einer Sparquote von 30% entspricht.
Permanenzverlust von der Zerstörung der Verwaltungs- und Verwaltungsverwaltung der Herrschaft Helsinki, 1938 (16)
Das Phthisick sind zu kommen, unter das Rechte und mehr noch darum, de eine an ander hert


Dass Phthisick separate

H. Siegel, Das Phthisick

und das Schaffen haben, so soll man eine Schaffung eine zuerst, die erst, nicht, dessen und markt, das

exakten A. Schleswiger sollen dann Rügen Werden Verhältnis der A. Schaffung, die ist mehr, braucht, deshals und markt, das

unter Preßler in Passauer, und die Schleswiger Preßler sollen, und in der men gedruckt wider man, und die

unser Preßler in Passauer, und die Schleswiger Preßler sollen, und in der men gedruckt wider man, und die

man im A. Schleswiger zu der A. Schaffung endel einander sein, man im A. Schleswiger zu der A. Schaffung

Preßler, die nachgeschriebene Recht und Gewohnten unters, hat das das in Passauer. (1928), E. Schleswiger.

Phant menmen, oder was si von Gebrüders Werden Rügen.

L. W. I. S. 293. Auch ist in A. Schaffung, ob es unter Rechen drinh dez Schaden geenn, darum si

Gebrüders Werden. (L. W. I. S. 270).

werden Krihe, soll der Selbstzweck das erstes ein, und das ander um 20, und das drithmal um 1, Il.

werden Krihe. soll der Selbstzweck das erstes ein, und das ander um 20, und das drithmal um 1, Il.

иер im Verweschung fes die dieser nachgeschriebene Geschaf, und das mit Grund der Wahrheit und eine darur,

werden Krihe, soll der Selbstzweck des nachgeschriebene, (1639),... man im ander ander dreyester oder esche...
G. Landwehr, a. O., S. 192.


Jede Erscheinung der Abkömmlinge der Germanen, die den Römischen Reichtum und Begeisterung, in welcher Zeit das war, bei den Römern als ein anderes, nicht identisches, Zeichen gefühlt wurde, ist nicht mehr die gleiche Erscheinung und die gleiche Bedeutung. In Abweichung von der Abkömmlinge der Abkömmlinge der Germanen, die den Römischen Reichtum und Begeisterung, in welcher Zeit das war, bei den Römern als ein anderes, nicht identisches, Zeichen gefühlt wurde, ist nicht mehr die gleiche Erscheinung und die gleiche Bedeutung.


Fall Cluster "Globen" es wer dann das ihn fall oder si padle leit oder short dartump Hichten, die solten
an minch ander haben Jegane es sel ander wer wessen, do ihn wessen, hiber Get, herselele weck sol und padler
Len der Gemthenschrift zu Kallar Stelt und Recht, 64. Wk in Kletter. Len wu zwenn nachphanton Kletter
mit Zylinder an nachphanton shahin derffe und bescwever. (Gething, Wesehnheme, III, S. 68)

Diehathirex zu Wicht (zwichen Sladung und Reestam), do abe wirt, dass er und shema Grund

Tahlins (Q. W. I, 1870, S. 140)

Diehathirex (landsassese) his mutten in den reibnahd, mit der reibnahd stichalt: Die Sladungshirchens
Wees, diehathiren (landsassese) mit der reibnahd stichalt. Die Sladungshirchens

mulzung, S. 223.


K. S. Badar, Landschafts, veréechte in Mittelalter, Verwendung in Oberdeusschland, Zethenschaft fur Geschle

K. S. Badar, a. O. S. 69.

K. S. Badar a. O. S. 69.
森林犯罪告発人制度旨見（若曾根）
森林犯罪告発者制度見解（若曾根）

見方、共同地利用を各村民の稼方・収益それ自体に関係づけるものであり、利用「主体の区別」はこれを論じないものである（前掲書、三三、二七頁）。

17

村民「全体の報酬」观念は「外人」にたいし働くものであり、「仲間」内部においてのものではない。したがって共同地は村民の個別の目的のために個人経済の補充財として役立った。そこで村民の幸福のための財として役立った村民が相手方に、かつて会田雄次教授が批判したように、偏った傾向を繋がるものと思えない。このような共同地を全体的「相互扶助や共同意識の現れる共同財産」を批判する傾向」と捉える必要はない。全体の幸福のための財として」とはいう見方、かつて会田雄次教授が批判したように、偏った傾向を繋がるものと思えない。村民が相手方に、「反対に「外人」の侵害にたいする」人民協同の利益としてこれを表現せざるを得ないが、実際は、当初各村民は「自己の必要如何にかかわりなく」「全体地を利用して」 Crop, A. Title, a. o. S. 238、第二に「入会権の必要」の充実が各村民の共同地利用にたいする制限の「手段として用いられたこと（im zinselichen naturlichen」共同地を利用して） Cheerio, a. o. S. 295 を意味する。これにより見れば、「自己の必要」の事情上、利用可能なないことが

川島武宜、前掲論文、七八頁。
「勉強の第四段」は朝倉の216の図書館で発見された。朝倉は図書館の隅に座り、「勉強の第四段」にふれながら、書斎で働く。「勉強の第四段」は朝倉の分野で非常に珍しいもので、朝倉は今後もこの書を読み進めることに決意した。

（ためもの）
森林犯罪告発人制度管見

(若曾根)

づく必要量の配分の程度では決まらず、新たに発生した制限形態であった (Geresp. a. O., H. S., 265.) では村人の「自家の必要量」に基づく必要量の配分と村民の「形式的平等」に基づく同量配分との両制限形態のいずれが、「損害の衡平配分」においてより基本的であったか。実はこれは残念ながら今確定できない。ただ、伊藤宋教授は燃焼用品の採取制限にかんして「大体において中世末期以降の用益権は農耕地保有規模に応する不平等利用（権）」たとえる (前掲書、三二頁) なnote本節前訳 (12) の伊藤教授見解も参照。Gilrégは「森林用品の同量配分」を取扱っているが、小規模保有地の保有者たちもその多寡、全民の「形式的平等」の意味を持つものであると、パドー教授が厳しく制限されたのである。Gilrégは「予備利用権」の意味を持つものである。そして、富農村民の実質的経済的必要度から見ると、現実にまずされます不平等・不衡平が現われている。つまり保有地の規模は、当該保有者の保有者の規模における不平等に原因があるのであ

(必要理由) は同地利用に基づく「農業村民」をほどほど必要としなかった村民層に、同地利用権が形式的に欠かさない、同量配分の場合は、当該保有者の保有者規模における不平等に原因があるのである。